
幼馴染 second love

kerube

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染 second love

【Nコード】

N9133J

【作者名】

kerube

【あらすじ】

「幼馴染」の続編です

一話

四年後俺はあれから色んな人から告白されてるが断っている。
有紗のことがまだ好きだから。

ある時携帯がなった。

メールだ。

差出人は…

「有紗！？」

突然の出来事に俺は驚いた。

内容は

「今度の日曜にそっちに帰るよー」

と言うことだった

（有紗が帰ってくる…）

俺は素直に喜んだ

「…ってか有紗俺のこと覚えてくれてたんだな。」

（…今度の日曜に、か。って！俺の誕生日じゃん！）

俺は有紗にこう返事した

「今度の日曜俺の誕生日だってこと分かってる？」

そしてすぐ有紗から返事が。

「うんあの約束もちゃんと覚えてるよ。」

あの約束とは有紗が帰って来たら俺がまた告白してそれに有紗が返事をすると言うものだ。

俺は日曜を楽しみにすることにした。

二話

俺は彰太と愛花ちゃんを呼び出した

そう昨日の有紗からのメールを二人に伝えるために

「実は昨日有紗から今度の日曜にこっちに戻るってメールが来た」

「えっ！？ほんとに（か）？」

「うん」

「そう・・・なんだ・・・」

（なんか愛花ちゃんが元気ないな）

「どうした？」

「えっ！？な・・・なんでもないよ」

（なんか照れてる？

それを見てる彰太が今度は不機嫌になるしいったい何なんだ？

愛花ちゃんが俺の事を・・・？

それはありえない　じゃあ翔太が愛花ちゃんを？

それはありえそうだな。よく愛花ちゃんの話してたし）

「彰太？」

「ん？」

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

「ならいいけど。まあ用件はこれで終わりだ」

今日は2人が変な感じがこの後もずっと続いた

愛花ちゃんは授業中も俺を見てるし

彰太は愛花ちゃんを見てるという

今までにないことが起きていた

まあ俺はこれから何か起きるような予感がした

三話

メールが来てから数日経って、とうとう約束の日曜日の前日になった。

俺のそわそわとした落ち着きのなさは家族にも容易に伝わったらしく、家族が俺の様子を伺っているのがわかる。

ちらちらと視線を送り、俺を気にするようなりビングの様子に俺はとうとう耐え切れなくなり、自室へと引き返した。

明日、あいつに会える。

長い間思いを寄せたあいつの恋人についてになれるのだ。

高揚と不安で何も手につかず、俺はどさりとベッドに沈み込みながらぼんやりとしていた。

突然、静かな部屋中に電子音が鳴り響いて、俺はびくりと肩を震わせた。

飛びつくように机に置いていた携帯を掴んで、ディスプレイに表示された名前に、すぐさま嫌な予感が過ぎった。

七条愛花、と液晶に映し出される。

何か、学校のことだろう、と半ば強引に自分を納得させ、俺は通話のボタンを押した。

四話

「愛花ちゃんか。どうした？」

「有紗と修也君が…いや何でもない。」

愛花ちゃんが何か途中まで言いかけてやめた。

「ん？」

「修也君が有紗のこと好きなのは分かってる。告白したことも。」

「ああ。」

「だけど…だけど!!」

「だけど？」

「私も修也君が好きなの!!」

「えっ!？」

俺はいきなりのことに驚いた。

「ごめんね？有紗のこと好きなのに。」

「別に謝らなくて良いよ」

「ありがとう。そういう優しいところが好きなんだ。」

「まあ俺も気持ちに応えてあげられなくて、ごめんな。」

「じゃあ、また明日公園で。」

「彰太にも電話しとけ。」

「何で？」

「良いから。」

「分かった。」

「電話の内容は今のやり取りを彰太に伝えること。」

「何で？」

「言っても良いが、彰太がどういう反応するか予想がつくぞ？」

「じゃあやめとく。」

「ああ。」

五話

俺が寝ようとしたその時、突然携帯がなった。

ディスプレイには「七条愛花」の文字が表示されている

「愛花ちゃんからって珍しいな」

「もしもし…彰太くん？」

「ああ。どうした？」

「私…修也くんにフラれちゃった…。」

「そうなんだ…。」

俺はどう声をかけて良いか分からなかった。

愛花ちゃんが電話の向こうで泣いているのに俺にはどうすることも出来なくて、でも、愛花ちゃんの事が好きなんだ。

「俺じゃ…修也の代わりになれないかな？」

「え！？」

「俺は愛花ちゃんのこと好きなんだ。」

「ふふふ…修也くんが言ってたことってこの事なんだ。」

俺は突然のことに驚いた。

「え！？」

「さっきね、修也くんに「話した内容を彰太に言え。」って言われたんだ。「何で？」って聞いたら「言っても良いが、彰太がどういう反応するか予想がつくぞ。」って言われたんだ。」

修也にはお見通しだったんだな、と思った。

「そうなんだ。」

「うん。自分への好意には鈍感なくせに他人への好意には気づくみたい。」

「有紗ちゃんや愛花ちゃんもそうだけだな。」

「言えてる。」

その声からもう泣き止んで笑ってるんだと分かった。

「んで、返事は？」

「んー、いいよ。」

「随分あっさりだな。」

「諦めの良さが私の良いところからね。」

俺らは夜も遅いというのに、大声で笑いあった。

まあそんなことがあり俺と愛花ちゃんは今恋人となった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9133j/>

幼馴染 second love

2010年10月15日22時57分発行